

論 文

児童養護施設の進路支援とその課題

山口季音*1

キーワード：児童養護施設、進路支援、子どもの進路

1 本稿の目的

児童養護施設は、なんらかの事情によって家庭で暮らせない子どもが安心安全に暮らすための児童福祉施設であり、そのような子どもたちの自立やそのための進路を支援する場でもある^{註1}。

児童養護施設での進路支援は、さまざまな形で実施されている。子どもが施設を退所した後のアフターケアや、施設での暮らしの中で退所のための支援を行うリービングケアは、以前よりその重要性が指摘され、支援の試みが行われている。

子どもの児童養護施設退所後に向けた進路支援は、スムーズに進むこともあれば、思いがけない課題に直面し、うまく進まないこともある。たとえば、山口(2017)では、高校卒業後に進学をめざす子どもが、進学にかかる金銭面の課題以上に、退所後にかかわることになる家族のケアを優先し、進学を諦めていく様子が指摘されている。

従来の児童養護施設の進路支援に関する研究では、その教育環境の課題が指摘されてきた。さまざまな課題を抱えた子どもの集団生活では、職員が十分な支援を行うことは難しい。そのため、施設の子どもの学習支援、たとえば学習ボランティアなどを積極的に活用することが論点となってきた。近年、とくに子どもの貧困問題と関連して、児童養護施設での教育支援が強く求められるようになってきている²⁾。

一方で、措置前の家庭環境ゆえに、学習意欲や学習習慣の形成とは縁がなかった子どももおり、それぞれの子どものに合った教育的かわりが求められている。児童養護施設で生活する子どもの背景は様々であり、

それぞれのニーズに合った支援が必要となる。このように考えると、児童養護施設の進路支援においては、進学であれ就職であれ、「どのような進路を望むのか」という子ども自身の意思が重要となる。とくに近年では、これまで困難とされてきた高等教育への進学が、「高等教育の修学支援新制度」の導入によって、施設出身者の進学にかかる費用がかなりの程度軽減されることになった。こうして制度によって進学のハードルが下がったとするならば、より求められるようになるのは、子どもの「退所後にどうしたいのか」という意思や希望だろう。

ただし、このような将来展望は自然と作られるわけではない。親・保護者との関係がうまくいっていなかったり、退所後に親族からの援助が期待できない状況に立たされた子どもが、自らの将来について前向きに考えることは、決して容易なことではない。この意味で、子どもの進路形成において、施設職員が子どもの将来にかかわる意欲をどのように支援しているのかは、今後の支援を考えるうえで必要不可欠であると考えられる。しかし、これまでの児童養護施設の進路研究では、こうした子どもの進路支援とその課題には十分に焦点が当たっていない。

以上の関心によって、本稿では、児童養護施設の職員にインタビュー調査を実施し、子どもの進路に対する意欲や展望の形成を支援する際の課題を考察することとした。

2 児童養護施設の進路支援に関する先行研究

2.1 早期退所による自立支援の不足

*1 至誠館大学 現代社会学部

児童養護施設の子どもの進路研究では、古くから、児童養護施設を早期に退所する際の「強いられた自立」が課題として提示されてきた。また、高校進学率も全国平均と比較して低いことから、学校や施設における進学に対する支援の不足も指摘されていた。たとえば、小川利夫ほか『ぼくたちの15歳 養護施設児童の高校進学問題』（1983）では、高校進学できなかった場合に、自動的に退所となるという進路支援における課題が提示されている。また、中学における学習支援においても決して十分とは言えず、子どもが学力的な困難を抱えているという問題も高口（1993）の研究において示されている³⁾。

このように、2000年以前の児童養護施設の進路支援は制度的にも困難であった。そもそもとして、児童養護施設、もっと言えば社会的養護の認知度が現在よりも遥かに低く、施設の子どもの進路が「社会で解決すべき問題」として認識されることはなかったと考えられる。こうした時期の施設の進路支援に対して社会的な注目や支援がなかったことは、後に「貧困問題」として注目されることにもなった。たとえば、2007年大阪府で実施された「若年不安定就労・不安定住所者聞き取り調査」報告書（釜々崎支援機構ほか2008）では、対象者のうち、児童養護施設で生活していた人の割合が一定数みられた。

2000年代になっても、施設の子どもの高等学校への進学率は9割に届かない状況であったが⁴⁾、施設の子どもの進学のための支援は拡充されていった。現代日本社会において、将来的な目標を考える前に高校への進学が叶わないとなると、大きな壁になる可能性は否定できない。現在でも施設の子どもの高校進学率と全国平均には若干の差はあるものの、かなりの程度縮まってきたのは教育格差の是正からみて大きなことである^{註2)}。

以上のように、2010年代以前の研究では、施設の子どもの進路形成はたいへん困難であることが示されていた。子どもの進路に関する意思形成を議論すること

自体が難しかったと考えられる。そのため、子どもの進路形成に関する支援の研究自体がほとんどみられなかった。

2.2 高等教育進学の困難

2010年代に入ると、子どもの進路形成に関する支援として、「高等教育への進学」に焦点が当たるようになる。これは「子どもの貧困」問題が注目され、教育支援の必要性が主張されるようになり、施設の子どもの進路問題が可視化されていったこともあるだろう。

それらの研究においては、施設における教育環境の課題により十分な支援ができていないことが主張されてきた。

まず、児童養護施設が子どもの集団生活であることに由来する諸々の課題が指摘されてきた。もちろん、集団生活はマイナスの要素だけではない。その良し悪しはそれぞれの子どもにもよるだろう。また、児童養護施設の教育環境は、設備としては勉強に熱心ではない家庭と比べても整っていると思われる^{註3)}。しかし、子どもが学習に集中できる環境かといえ、そうした環境にはなりにくいのも確かであった。とくに、施設内で暴力的な関係がみられたり、集団が騒がしい状態であったりすることで、学習の意欲や学力の向上ができる環境とは言い難いことも多い。さらに、施設に入る前の生活環境も子どもたちの学習の習慣や進路観に影響を与えている。そうした学習に対する動機を持っていない子どもたちもいることで、職員の支援が十分な効果を発揮できないことが指摘されている。また、ここに施設内での職員の不足などの問題も重なり、問題をさらに困難にしているのである⁵⁾。施設も学習ボランティアを取り入れる試みを行ったり、地域の学校と連携して学習支援を拡充させようと努めている。しかし、全体的な施設の状況での学習支援は難しい。

これに加えて、進学のための費用の問題がも、施設出身者の進路形成を妨げてきた。親・保護者の援助が期待できない施設の子どものは、たとえ学力や学習意欲

を形成したとしても、費用の面で進学をあきらめざるを得ないケースがあり、子どもが学習に意識を向けにくいのである⁷⁾。

2.3 本稿の課題

これまで見てきたように、児童養護施設の子どもの進路支援に関する先行研究においては、高校進学や高等教育進学に関する問題に焦点が当てられてきた。現在では、高校進学問題が解消しつつあり、高等教育進学にかかる費用の問題については、2020年4月より高等教育の修学支援新制度が実施されたことにより、施設等出身者の費用面での負担が大幅に減少している。こうした支援が拡充したことで、より子どもの進路形成の思いが重要となるといえるだろう。というのも、進路に対する選択肢を自分で決めなければならない状況ができたからである。そして、選択肢が増えたからこそ周囲の支援がより重要になる。

施設職員の進路支援は、子どもに大きな影響を与えることが指摘されている⁸⁾。また、施設職員が子どものロールモデルとなることもある¹⁰⁾。

これらの研究は、施設の子どもの進路形成の一端を明らかにするものであるが、主に子どもに焦点を当てたものである。そこで本稿では、施設職員が子どもの進路形成への意識をどのように支援しようとしており、現代ではどのような課題があるのかを考察することとした。

3 調査の概要

3.1 A 学園と調査協力者

本稿は、2019年7月から2022年11月現在までのおよそ3年間、児童養護施設A学園（以下、A学園）で行った調査データに基づくものである。

A学園は近畿圏の閑静な地域にあり、子どもの定員約30名である。住まいは幼児と小学生以上、および男女別に分かれており、6人程度の小規模な生活が営まれている。ユニットで分けられており、幼児から高校

生までが暮らしている。

調査は継続的に実施しており、2022年11月までにオンラインによる聞き取り調査も含めて17回の調査を実施している。これまでの調査協力者は、A学園の施設長、統括主任、各ユニットの代表者2名である。インタビューの録音時間は、最長2時間程度、最短で1時間程度である。

本稿では、A学園の統括主任で家庭支援専門相談員であるトヨタさんと、進路の観点について聞き取ることから中高生を担当しているハヤシさんへのインタビュー・データを用いて分析を行う。

トヨタさん（統括主任、家庭支援専門相談員、30代女性）は複数の児童養護施設で職務経験があり、計10年以上の経験を有している。ハヤシさん（中高生担当主任、50代女性）は、妊娠出産などを挟みながら大学卒業後6年ほどA学園とは別の児童養護施設で働き、それから育児に専念するため退職した。いつか児童福祉の仕事に復帰したいと考えており、約17年ほど経ち、新しく立ち上げることとなったA学園の求人に応募し採用され、働くこととなった。

3.2 A 学園の子どもと進路

「進路支援」という観点から見た場合、A学園には大きな特徴がある。それは、A学園が近年新設された児童養護施設であるため、まだ「退所後のモデル」が十分ではないという点である。たとえば、短大、専門学校への進学者はいるが、大学進学者はまだいない。また、就職した子どもも少ない。つまり、これから進路支援のモデルを形成していく段階の施設である。ただし、施設長や統括主任は同じ法人の別の児童養護施設での勤務経験があり、子どもの進路支援の経験は豊富である。

3.3 調査倫理

本調査を実施するにあたり、A学園の施設長および統括主任に対して調査の目的・方法・データの取り扱い

いを説明したうえで、調査協力を依頼する文書に署名・捺印いただいている。

インタビューの内容は、調査協力者の許可を得たうえでICレコーダーに録音し、すべて文字化したうえで分析を行っている。

データを用いる際には、協力者の氏名や施設名を匿名とするほか、そのまま記載した場合に匿名性を損なう情報について若干の加工を施すなどプライバシーの保護に努めている。なお、本調査研究は、2019年に至誠館大学倫理委員会の審査を受け、承認を得たものである。

4 調査結果

調査の結果、A学園の進路支援とその課題は、まず子どもに進路や将来の展望を考えてもらうこと、それ自体が困難になっている現状がわかった。次に、そうした困難の背景の一つとして、子どもの「自信」が家族関係の中で形成されず、施設で形成する時間もないという中高生ならではの要因があった。以下では、この2点の詳細を記述していく。

4.1 将来展望の形成の困難

A学園では調査開始から現在まで、女子の方が生活が安定している状況があった。短大や専門学校への進学者は女子であり、少しずつではあるが、施設としてもどのような進路支援をすればよいのか、そのモデルができ始めているという。

一方で、男子の中高生は多くの課題が顕在化し、職員も支援に悩む状況にあった。ここでは、男子の中高生についてみていきたい。A学園の男子は、時期にもよるが6人前後であり、中学生が3名、高校生が3名であった。

統括主任によれば、中高生男子は、将来への展望を考える以前の課題が山積しているという。たとえば、発達障がいをはじめとする個人的特性である。

トヨタさん：去年からの継続ですけど。中高の男の子なんか、生活の時間を守れなかったり、ゲームに依存してしまったり。そこで職員も色々やり取りしようとするんですけど、それがやっぱり伝わっていかないし、ある程度大人の力で抑えていくってこともできなくはないんですよ。けどそれをしたところで長続きしないし、お互いにとって良くないし。あと、個人個人の特性みたいなものもありますし。【2021年6月】

もちろん、個人的な特性だけが課題の背景にあるのではない。そのような特性がこれまでの生活環境の中でうまく理解されなかったことが大きな要因として挙げられるだろう。A学園の子どもの中には、他の施設や里親のもとで馴染めなかった中高生もいた。このような子どもたちは、施設の中でも進路へ意識を向けることは困難であった。

さらに、職員と子どもの気持ちのすれ違いや、子ども自身の納得できない気持ちが進路支援を妨げることもある。

ハヤシさん：(男子の中高生について) あの子たちはあの子たちの言い分があったり、もちろん身勝手な理由だったりもします。「周りがこうだから」とかって言うてるのも多いのですが、それをすべて否定するのではなくやり取りをする中で、「でもこっちもこういうことでそこはちょっと我慢してほしいんや」と説明します。やっぱり施設だからってあの子たちの中でいう部分もあります。

【2021年3月】

つまり、職員側としては、施設に措置された子どもたちの背景をふまえ、「将来」に目を向けてほしい、保護者の援助が期待できない中でも生きていけるよう、自立をしてほしいと願って対応している。しかし、施設の子どもたち、とくに意欲がなかなか出てこない子

どもたちにとっては、周囲の一般家庭と比較して、「なぜ自分たちだけが」という不満を感じる。一般家庭の子どもでも将来を考えて行動したり、時には施設出身の子どもよりも先々を考えて行動しなければいけない子どももいるだろう。しかし、将来や進路に目を向けたくない子どもたちは、「将来のことなどまだ考えていない」同世代の人々を参照し、進路について考えない日々を送っているのである。それに対して、職員も一定の理解をしているからこそ、そうした考えを否定せず、どう伝えるかで葛藤している。

施設職員も、「施設」という枠組みのみでとらえるのではなく、多感な中学生・高校生の時期という発達の観点から、彼らに対する対応を考えていた。

ハヤシさん：他の職員とも、特に中高生は思春期でこちらの言うことを聞かなくて当たり前やっというくらいの感覚で、それでも向き合っていかなかちゃならないという話をしています。【2021年3月】

しかし、職員が向き合っていこうとしても、状況は困難なものがあった。とくに、従来の研究で指摘されてきたように児童養護施設という集団生活の場であることは、進路を考えるどころか、学校への不適應の連鎖という形で表れてしまうこともあった。それは、2021年時の調査から1年後、さらに悪化しているようであった。

ハヤシさん：個々の課題が本当に大きいですけど…集団になったときに課題の部分が、より発揮されてしまうというか。今、学校行けてない子がとても多くて（中略）発達障がいの子も多くて。小学校までは何とかやれてたんですけど、中学校、高校にあがるにつれて、周りとの差を痛感して、「でけへん」「ついてかれへん」って。そういう自分も受け入れられへんし、だからといって

「何とかして頑張ろう」という気も出ないというか。【2022年7月】

こうした「周りとの差」は、進路を考えない理由として「周り」を理由としていた子どもたちにとって、精神的に大きなダメージになりうるだろう。しかし、そのような現実に対して、自立の意欲を示すかといえ、そうなるのはなかなか難しい。

ハヤシさん：そうなってくると、「どうでもいい」と。「将来どうしたいの？」って聞いても、「のんびり暮らしたい」とか、「楽をして暮らしたい」とか、くらいの答えしか返ってこなくて。集団になると尚更。【2022年7月】

将来が定まらず、自尊感情も形成されない中で、子どもたちは自らの将来のことを「考えない、考えられない、考えたくない（ハヤシさん：2022年10月）」精神状況になっていることがうかがえる。そうした中で、職員もさまざまな試行錯誤を行っており、その成果が出始めた感触もあるという。しかしそれは大変なエネルギーの要る作業でもある。

ハヤシさん：（子どもは）一人では課題に向き合えないというか、本当に、それぞれ、家族でもなくて、学校でもなくて、でも一緒に生活しなくちゃいけない仲間ってところ。しんどい部分が大半なんですけど、いろんなことを学んでいけてるって。男の子の方はまだ、気づくとかないんですけど（笑）でも、それに向き合っていく大人っていうのが、本当にもう、エネルギーに要る作業で。【2022年7月】

以上のように、A学園での中高生男子の進路支援は、非常に厳しい状況にあった。それは施設の中での環境以上に、個人の特性やこれまでの生活環境であったり、

「周囲」の影響が大きいことが示唆される。

さらに、施設を退所した後の進路となると、子どもの「家族関係」を無視するわけにはいかなくなる。そこで次に、子どもの家族関係が施設の進路支援に与える影響を見ていきたい。

4.2 家族関係

進路支援と子どもの家族関係について、A 学園の職員からは、中学生や高校生から施設に措置となった子どもの話が挙げられた。A 学園は新しい施設であり、幼いうちに入所し、中学生や高校生になるまで過ごした子どもはまだいない。いま、職員が対応している中高生は、長い時間家庭のもとで過ごしていたか。あるいは施設や里親になじめずに転々としてきた子どもたちであった。

このような子どもたちは、家庭での生活が長いこともあり、将来や進路形成のためのかかわりが困難な側面もあるという。

ハヤシさん：(退所までの) 時間が限られているってところで、しかもやっぱり (家庭で) 積み重ねてきたものが大きくなって、背負ってるものも。幼児とか小学生ももちろんケースとして大きいものもたくさんあるんですけど、そういうケースの中でずっと生きてきて、保護されてってなると、本当にここでできることって、あまりなくて。それも抱えて人生を送っていかなくちゃいけないなっていうところなのと、高年齢児^{註3}で入ってきた子って、家庭復帰はまず望めないというか、なので、入ってきた時点で自立をめざして「どうしていこう」っていうのを、大事にしているというか。目の前のその子のことも受け止めるんですけど、その先というか。【2022 年 10 月】

そうした子どもたちの保護者が子どものことを意識しているかどうかは、下記で統括主任のトヨタさんが

言うように、実際のところその保護者次第であり、進路についても同様である。

トヨタさん：(子どもの学習や進学・進路について) 気にする保護者もいます。半分はいないですね。(気にしないのは) 親の能力的な部分もあるかもしれないです。家でその辺りですごく苦勞されていて、もうちょっと家では見れないってなったケースなんかはすごく気にされています。【2021 年 6 月】

このような状況の中で、中高生担当のハヤシさんは、進路支援の困難になる要因の一つとして、中高生の「自信のなさ」と保護者との愛着関係のなさを指摘し、これまでの生活環境について語っている。

ハヤシさん：まず一つは自分に自信がないっていうのと、何でしょう、ええと、やっぱり愛着障害ってところも大きいのかなと。特に意欲のない子たちなんかは、親にあまり育ててもらった記憶というか、感覚がないだろうなと。そういうお家も多くて。自分の存在価値みたいなものも、かわってくるのかな、っていうか。そのあたりが感じられないというか。で、いま実際親とかかわれるかっていったら、そこも難しく。【2022 年 10 月】

A 学園では、何度も調査する中で、職員が口をそろえて指摘する家族関係があった。それは、「施設では好き勝手にし、親の前では真面目になる」というものである。A 学園としては、親・保護者に対して甘えたり、わがままを言える関係になってほしいと考えているが、実際はそうではない。子どもは、親や保護者に対して、まじめな自分、うまくやっている自分を出そうとする。しかし、それは実際には難しい。

ハヤシさん: (子どもは) 自信がないのも当たり前ですし、自尊心もすごく低い。親に対して怒りをぶつけられたらいいんですけど、それができないで、こちら(施設)にぶつけるしかない。(親と会えないのではなく、親に対する) 遠慮と、言っても仕方がない、何を言っているのかわからない。諦めてるんでしょうし。【2022年7月】

このように、とくに 中高生男子は、家族との関係は進路において効果的な結びつきにはなりにくい状況があった。

児童養護施設の子どもの家族関係という、親・保護者が子どもの意志を尊重しない、またはそれができない状況によって、子どもの意欲が削がれることは想像しやすいと思われる。しかし、今回の調査では、「子どもとの関係がないこと」から来る問題が浮かび上がった。将来の展望は、ある程度は保護者との生活の中で見えてくるものもある。それが無い場合、施設や里親との生活の中で形成できるよう、周囲が子どもを支えていく。しかし、家族との交流がないままある程度成長し、その後で施設に措置された子どもは、将来の手がかりがなく、それを周囲と形成する時間も限られてしまっているのである。

5 まとめと考察

以上の結果、A 学園の子ども、特に中高生男子の進路支援の困難の内実が明らかになった。

施設職員は、個人的な特性ゆえに進路形成に時間がかかる子どもの課題に取り組んでいた。発達障がい等の子どもへの対応はこれまでも児童養護施設の課題だったが、進学負担が軽減され、施設の子どもの進路の選択肢が増えたからこそその課題があるかもしれない。こうした進路の課題は、継続的な調査を実施することで今後明らかにしていく必要があるだろう。

また、A 学園はさまざまな背景のある子どもを受け入れており、それが進路の問題と密接に結びついてい

た。厚生労働省は2017年、「新しい社会的養育ビジョン」で3歳未満は5年以内、3歳以上の未就学児は7年以内に里親委託率を75%とする目標を立てた。これは里親委託の推進のためであるが、当然のことながら、里親家庭に任せることですべてがうまくいくわけではない。個人的特性から里親と不調になり、施設に措置される子ども等、施設の子どもの「背景」がより複雑化していく可能性があるかもしれない、もしそうだとするならば、施設の子どもの進路支援は、施設の場合だけでは困難にならざるをえないだろう。施設の子どもの進路に焦点が当たる中、こうした子どもたちへの支援をいかにして行うのかも考えていく必要があるだろう。

[註]

註1 令和3年3月末現在、児童養護施設は全国に612施設あり、おおよそ2歳から18歳の子ども約2万3000人が生活している¹¹⁾。

註2 ただし、高校に進学できればよいというわけではない。というのも、高校を中途退学してしまう問題が生じるからである。既存の調査では、施設の子どもの高校中退率は全国平均よりも高いことが示唆されている¹²⁾。

註3 大阪市児童福祉施設連盟養育指標研究会が行った大阪市の児童養護施設等への調査結果によると、大阪市の児童養護施設の小学校から高校までの子どもおおよそ400人のうち、9割が勉強するための机を持ち、7割弱の子どもが宿題を「ほとんどする」と答え、さらに半数の子どもが宿題以外の勉強をしている¹³⁾。

註4 高齢児とは、中高生の年齢の子どもを指している。

[引用文献]

- 1) 山口季音(2018)「児童養護施設の自立支援における葛藤」『教育学研究紀要』63, 737-738
- 2) 内閣府(2019)「子供の貧困対策に関する大綱～日

- 本の将来を担う子供たちを誰一人取り残すことがない社会に向けて～」, 10
- 3) 高口明久編（1993）『養護施設入園児童の教育と進路』多賀出版, IV
 - 4) 坪井瞳（2011）「児童養護施設の子どもの高校進学問題：非進学者の動向に着目して」『大妻女子大学家政系研究紀要』（47）, 73
 - 5) 妻木進吾（2011）「児童養護施設経験者の学校から職業への移行過程と職業生活」（西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』）解放出版社, 146-147.
 - 6) 山口季音（2021）『児童養護施設の生活環境のダイナミクス 家庭で暮らせない子どもの育ちと職員の実践』学文社, 125-126
 - 7) 妻木進吾（2011）「児童養護施設経験者の学校から職業への移行過程と職業生活」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』解放出版社, 144-145.
 - 8) 永野咲（2012）「児童養護施設で生活する子どもの大学等進学に関する研究」『社会福祉学』52(4), 28-40
 - 9) 平松喜代江・堅田明義（2020）「児童養護施設退所者の大学等進学実現を可能にする支援について」『社会福祉学』60(4), 14-27
 - 10) 長瀬正子（2011）「高学歴達成を可能にした条件」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』解放出版社, 125
 - 11) 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2022）「社会的養育の推進に向けて（令和4年3月31日）」2
 - 12) ブリッジフォースマイル（2018）「全国児童養護施設 2018 社会的自立に向けた支援に関する調査」, 10
 - 13) 大阪市児童福祉施設連盟養育指標研究会, 2010, 「今、施設で暮らす子どもの意識調査：10年を経て児童養護施設, 情緒障害児短期治療施設, 児童自立支援施設の10年」, 88-95

[参考文献]

- 1) ブリッジフォースマイル（2018）「全国児童養護施設 2018 社会的自立に向けた支援に関する調査」
- 2) 平松喜代江・堅田明義（2020）「児童養護施設退所者の大学等進学実現を可能にする支援について」『社会福祉学』60(4), 14-27
- 3) 釜々崎支援機構ほか（2008）「若年不安定就労・不安定住所者聞き取り調査」報告書
- 4) 木全和巳ほか編著（2010）『児童養護施設でくらす「発達障害の子どもたち」』福村出版
- 5) 厚生労働省子ども家庭局家庭福祉課（2022）「社会的養育の推進に向けて（令和4年3月31日）」
- 6) 内閣府（2019）「子供の貧困対策に関する大綱 ～日本の将来を担う子供たちを誰一人取り残すことがない社会に向けて～」
- 7) 永野咲（2012）「児童養護施設で生活する子どもの大学等進学に関する研究」『社会福祉学』52(4), 28-40
- 8) 長瀬正子（2011）「高学歴達成を可能にした条件」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』解放出版社, 113-132
- 9) 小川利夫ほか編（1983）『ぼくたちの15歳』ミネルヴァ書房
- 10) 大阪市児童福祉施設連盟養育指標研究会（2010）「今、施設で暮らす子どもの意識調査：10年を経て児童養護施設, 情緒障害児短期治療施設, 児童自立支援施設の10年」
- 11) 高口明久編（1993）『養護施設入園児童の教育と進路』多賀出版
- 12) 坪井瞳（2011）「児童養護施設の子どもの高校進学問題：非進学者の動向に着目して」『大妻女子大学家政系研究紀要』47, 71-77
- 13) 妻木進吾（2011）「児童養護施設経験者の学校から職業への移行過程と職業生活」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除』解放出版社, 133-155
- 14) 山口季音（2018）「児童養護施設の自立支援におけ

る葛藤』『教育学研究紀要』63, 733-738

- 15) 山口季音 (2021) 『児童養護施設の生活環境のダイナミクス 家庭で暮らせない子どもの育ちと職員の実践』学文社

付記 本稿は、JSPS 科研費（課題番号 19K14140）による研究成果の一部である。

謝辞 本研究の調査にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

Career Support and Issues for Children at Child Protection Institutions

Kioto YAMAGUCHI

Abstract: The purpose of this paper is to examine the issue of career support and its problems for children at child protection institutions. Previous studies have focused on the issue of children at child protection institutions going on to higher education, and have pointed out the problems of costs for higher education and group living in institutions. However, how staff members support children to think about their own future has rarely been examined. This paper examines the actual situation of career support at child protection institutions and the problems that children who cannot rely on their parents face in thinking about their own future prospects. For this purpose, an interview survey was conducted with the staff of one child protection institution. The results of the survey revealed that children who entered institutions at the age of middle and high school students had more difficulty in thinking about their future. This was because the children entered the institutions without having their self-confidence about themselves formed among their families, and without having time to form it in the institutions. This result will be an important insight for future career support in child protection institutions.